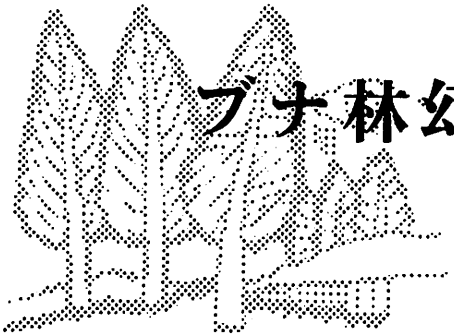

ブナ林幻想

八木三男

怠惰から生来自ら求めて自然、とくに山に親しんでこなかったわたくしも、近ごろは人に誘われてときどき自然に交じる。交じるといっても、近くまで自動車でいってちょこちょこと林に入るのであるから、他愛ないものである。岩船郡朝日村のスーパー林道や飯豊山系東麓の国民宿舎「梅花皮（かいらぎ）荘」の周辺などである。

五月の新緑のブナ林は、暗い杉林などと違って、陽光の微粒子が林のなかまで注ぎ、林全体が明るくなんとも心地よく、落ち着いた気分になる。林はブナ一色ではなく、カエデやトチなどが競いあって天に伸びている。地面は落葉が幾層にも積み重なってふくよかな絨毯を幾重にも敷きつめたようだ。そこに仰向けにひっくりかえって梢を眺めると、ブナの枝は隣のブナの枝と重なりあうのを嫌うかのように処どころに青い空を覗かす。また透明な若葉の重なりを通して青空が透けて見えるようだ。霊長類は熱帯雨林に発生し「濃密な緑の中で生を送ってきた」。「われわれが緑を求め、緑がない所では心が落ち着かずいらいらし、緑の中でこそはじめて安心感に浸れるのは、遠い先祖から受けついできた系統発生的な適応感覚によるものなのである」（河合雅雄『子どもと自然』岩波新書）。人間の本性がこの緑に深く根ざしていることを実感する。

わたくしがブナに明るさを感じたのに対して、イギリスの古い時代はブナの木は欝蒼と茂った堂々たる景観という印象が強いらしく、「汝ら陰多きブナの木よ」（ポウプ、一八世紀）、「茂りひろがって、流れのうえに蔽いかぶさって垂れているブナの木」（トムソン、一八世紀）などという。これは林ではないかもしれない。また、スペンサーは「フェアリー・クィーン」（一六世紀）でThe warlike Beech（戦争好きのブナの木）とうたった。そのためにブナは武器の柄にでも使われていたのだろうかと疑われている（『英

語歳時記』研究社)。ブナは歴史的に人間と深くかかわってきたから、人間の都合で色々ないわれ方をするのだろう。ちなみに、ブナの花言葉は「隆盛」である。

ブナ林は大量の落葉で厚い腐植層をつくり、それが天然のダムになって大量の水を湛え、浸透した雨水は年月をかけて清冽な水になって谷川に注ぐのだという。また、腐植層は人間の片足の下に小動物二千匹ともいわれ、それらが有機物を分解して肥沃な土壌を作りだす。こうしてたとえば三面川は豊かな清冽な水を保ち、鮎のすみかになる。

日本の太古は東日本を主にブナが蔽っていたが、いまや原生林は非常に少なくなった。三面川水源のブナ林も例外ではない。営林署がブナを犠牲にしてつくったスーパー林道で周辺のブナ林の六〇パーセントを伐採する計画をたてた。朝日村当局が公式に反対し、民間の反対運動もある。実際に同村の三面川の支流高根川周辺のブナ林を根こそぎ伐採した結果、高根川がたびたび氾濫し、住民が難渋している。それにしても、スーパー林道によってはじめてわたくしがブナの原生林にアクセスできるというのは大いなる矛盾である。

いずれにしてもわたくしのブナ林は牧歌的なのだが、ブナ林というとすぐワイマールから六マイルのところにあったブーヘンヴァルト強制収容所を思いだす。ブーヘンヴァルトそのものがドイツ語で「ブナの森」という意味だからである。

ブーヘンヴァルト強制収容所を初めて知ったのはブルーノ・アービッツの小説『裸で狼の群れのなかに』(井上正蔵他訳、至誠堂新書、一九七一年)であった。

ひとりのユダヤ系ポーランド人が古びたトランクに入れてひそかに強制収容所に子どもを持ち込む。その子どもを守りながら、アメリカ軍の到着前に国際収容所委員会の指導のもとに囚人が武器をとって決起し、自ら二万一千人の囚人を解放する。小説はこの劇的な時の流れを自身の経験に照らして克明に描いている。

小説はもっぱら強制収容所のなかを描き、ブーヘンヴァルトそのものは冒頭でほんの少し描かれるだけである。「エテルスベルクの丘のうえに高く立つ木々は、雨にけぶって、そよともしない」。「地面には、冬にさらされて縫目をあらわした葉が、無数に散りしき、腐蝕し、ぬれて光っていた」。「SS(ナチス親衛隊)隊員が五〇人ほど、かんたんな屋根のついたコンクリートのプラットフォームに立っていた。このプラットフォームはブーヘンワルト駅と呼ばれていて、ワイマルからこの丘にいたる鉄道線路の終点になっていた。収容所はここから近い」。そして、小説の最後に、収容所解放後、国際収容所委員会のもっとも若いメンバーである「プリブラとそのグループは、ホ

ッテルシュテット街道にむかって、森のなかを進撃して行った」とある。これで全部である。ブーヘンヴァルトに行ったことはないが「無数に散りしき、腐蝕し、ぬれて光っている落葉は「ブナ」そのものだと推測する。

ナチス強制収容所のなかで唯一自力解放を果たしたブーヘンヴァルト強制収容所では、設置された一九三七年から四五年四月の解放までに、ユダヤ人をはじめ連合軍・ソ連捕虜、さまざまな政治囚等約五万六千人が殺された。

『赤旗』（一九九四年五月二三日）の特派員報告によると、ブーヘンヴァルト強制収容所跡地に来年（一九九五年）四月一一日の解放五〇周年を記念して博物館がオープンするそうである。統一後の調査で初めて明らかにされたらしいのだが、その報告には、ブーヘンヴァルトのあるチューリンゲン州はその後ソ連軍占領地になり、同収容所にはドイツ人戦犯、容疑者等が一九四七年のはじめには一万六千三百七十一人が収容され、一九五〇年に閉鎖されるまで、劣悪な生活条件のもとで七千百十三人が死亡した、とある。そのなかには戦争犯罪の証拠調べもなく処刑された下級兵士も多く、ソ連軍の報復の意味が強かったという。ソ連占領地ではこの種の収容所や監獄が一三カ所あり、一二万余人が収容され、その三分一が死亡した。スターリンの報復主義がいたるところに貫かれていたことにあらためて慄然たる思いである。

本年五月二十日、ドイツ連邦議会（下院）はナチスの犯罪を否定するデマ宣伝を違法として罰する刑法改正案を全会一致で可決した。「ナチズムの支配のもとで犯された民族虐殺などの行為を、公共の平和を乱すような方法で公然と、または集会で正当化、否定、軽視した者は三年以下の自由剥奪刑または罰金刑で罰せられる」。ネオナチ勢力による「ユダヤ人虐殺はウソ」というデマ宣伝に対する対策をドイツ国民の圧倒的多数が支持し、「言論の自由の問題」とする数はわずか九パーセントにすぎないといわれる。

「時事通信」によると、六月二二日ドイツのマンハイム地裁は「アウシュヴィッツ収容所にガス室はなかった」等ナチスによるユダヤ人大量虐殺（ホロコースト）は「でっちあげ」と公然と主張した極右、ドイツ国家民主党党首デッケルトに対する差戻し審で、執行猶予つき禁固一年、罰金一万マルクの有罪判決をいい渡した。

しかし、この判決には後日譚があって、同被告を執行猶予とした理由のなかで、デッケルトに理解を示す判断を下したとして、当のマンハイム地裁が刑事法廷の担当裁判長と判決文を執筆した裁判官の二人を解任したというのである（時事通信、八月一五日）。八月九日に発表した判決理由では「戦後半世紀たつ今もなお、ドイツはホロコーストを理由に、ユダヤ人の政治的、道徳的、金銭的要求にさらされており、被告はこれにたいするドイツ民族の抵

抗を強化しようとした」と理解を表明、また「被告は意志強固にして知的な人物」と称賛して、執行猶予の理由とした。これに対して検察当局は「判決自体が反ユダヤ主義をあおる民衆扇動罪に該当する」と、裁判官訴追の構えを見せ、同地裁の裁判官会議がこの判決を支持しない決議を採択していた。

これを日本にあてはめれば、永野元法相は日本軍による「南京大虐殺」を「否定」、侵略戦争を「正当化」した廉により有罪、議会からの追放。桜井前環境庁長官も日本によって惨禍を受けたアジア諸民族を侮蔑した廉により同罪。羽田前首相は侵略戦争を「否定」もしくは「軽視」した廉により同じく有罪ということになる。

ドイツ人には「散策文化」というものがあり、森のなかの散策はドイツ人にとって不可欠のものだという。週末にドイツ人は森に正装して出かける。森が一種の社交場になるからである（高橋義人『ドイツ人のこころ』岩波新書）。そこはブナの明るい森である。しかし、いったん散策路からはずれて、深い森に入りこめば、森は暗黒の恐怖に変わる。

ドイツ南西部ライン川沿いの広大なシュヴァルツヴァルトはドイツ語で「黒い森」だが、一般にドイツでもそう信じられているように、ドイツトウヒやモミの木に蔽われて黒々としているためではない。いったん放牧や農業のために失った森を、ドイツ人が長い年月をかけて営々と植林して、いまのような整然とした針葉樹林にしたのはそう昔の話ではない。それ以前はブナやミズナラの木で蔽われた明るい森であった。それでもすでにシュヴァルツヴァルトであったのは、この未開の広大な原生林にいい知れぬ畏怖の心を抱き、「暗黒の森」（前掲書）をイメージしたからである。

ブナやミズナラの木で蔽われたヨーロッパの森は、そのままヨーロッパ文化の土壌を形成していった。ドイツ語のブナ（Buche）は本（Buch）の語源になり、英語の本（book）もやはりブナ（beech）がもとになっている。手近な辞書にブナの皮に文字を刻んだからだとある（『ジーニアス英和辞典』大修館）。

いま統一ドイツは、ヨーロッパ文化の土壌を培ったかつてのようなブナの森を政府が援助して復元しようとしているという。「経済林」として人工的に造林されたモミ等に比べて、成長速度も遅く単位あたりの蓄積量も体積あたりの価格も格段に低い「不経済林」であるブナをあえて造林しようとするところに、日本と根本的に異なるドイツの環境政策をみるだけでなく、ブナやミズナラの森に対するドイツ人の強い愛着と畏敬とをみる。また、これらのエトスがナチズムの復活を許さないひとつの強固な基盤になっていくのであろう。

（やぎ　みつお＝
にいがた県民教育研究所所長）